日本文化論から見る日本語表現の論理

小野正樹（筑波大学）

要　旨

本研究は日本語表現と日本文化に関連性が強くあることを意識し、日本研究や日本人論に見られる記述から、日本語の行動様式と使用される言語表現を抽出して、日本語らしさの論理を考えるものである。1960 年代以降の日本論、日本人論に注目し、日本社会でよく使用される日本語表現と、その発想を再確認した。言語表現の「慣習化」については、類似概念としても、「社会的強制」「感覚」など文化論では異なる視点や、発想が読み取れた。

キーワード:義理、恩、感謝、感情、論理、甘え

1. はじめに

日本語らしさとは何か、これは筆者が考え続けているテーマである。小野(2005)では「慣習化された日本語配慮表現の発想」として日本語らしさを論じた。日本語は論理的かという議論があるが、いわゆる西洋的な論理とは異なるものが働いている。これは外山(1987)で強く指摘された点である。日本語らしさについては、言語研究者のみならず、文化研究者からも様々な記述があり、日本文化論を読み進めていくと、日本人の言語行動からの興味深い指摘が多い。文化と言語表現には強い関係があると考え、国民性を論じる文化論から言語表現を説明する原理・キーワードを見出すことが、本稿の目的である。

各文化の特徴、独自性を他言語へ翻訳することは難しい。例として、ルース・ベネディクト（2005 p.166）が日本文化のキーワードとして主張している「義理」についての記述を紹介する。

（1）日本人が、今までに西欧人に「義理」の意味を説明する企てをしなかったのも無理はない、彼ら自身の日本語辞書でさえも満足にこの語の定義を下すことができないのだから。ある日本語辞書の説明によれば、義理とは「正しき道筋。人のふみ行うべき道。世間への申し訳に、不本意ながらすること」である。こんな説明では、西欧人には、なんのことだかよくわからないが、・・

ルース・ベネディクト（2005 p.166）

参考として、国語辞典と和英辞典の記述を紹介する。

（2）義理：　1）物事の正しい道筋。また、人の踏み行うべき道。道理。
　　2）職業、回想、親子、主従、指定などのさまざまな対人関係、交際関係で、人が他に対して立場上務めなければならないと意識されたこと。対面。面目。
　　3）つきあいや社交の場で述べる口上や挨拶。

４）特に世間的なつきあいの上で、仕方なしにする好意やことば。お義理。
５）血縁以外の者が血縁と同じ関係を結ぶこと。また、その関係。
６）わけ。意味。また、字句の内容。
７）（能で）劇としての筋、内容。また、その面白さ。

『日本国語大辞典』（精選版）

(3) 義理：良心などによる duty《◆個々の果たすべきことは　次の語も同じ》
立場上生じる obligation

『ジーニアス和英辞典』（第３版）

翻訳しにくい語というのは、固有性や特殊性から概念が他の言語には置き換えにくいもので、人間に普遍的であるとは言えないためである。
異なるアプローチをとるのが、比較文化論である。

(4) 比較日本文化論とは、「比較する」という開かれた態度において広く「文化」というものを考え、現在の「日本」という場所に住まうわたしたち自身のあり方を問い直すことをめざすものです。日本文化は決して他の文化や文明から孤立したものではなく、むしろその発端から現在にいたるまで他の文化との深い関わりのなかで成り立ってきたものです。文化交流の歴史こそが日本の文化の歴史だったといってもよいのですが、わたしたちはそうした流れを「いま・ここ」で改めて学問的に実践しようとしているのだとも言えるでしょう。

東京大学比較文学　比較文化研究室「文化紹介」（2018/01/23 閲覧）
http://fusehime.c.u-tokyo.ac.jp/senior/index2.html

比較文化については、早坂(2006)他にも見られる例を挙げる。

(5) 世界各国の人々が乗った豪華客船が沈没しかかっています。しかし、乗客の数に比べて、脱出ボートの数は足りません。したがって、その船の船長は、乗客を海に飛び込ませようとしますが…。さて、船長が各国の人を飛び込ませるために放った言葉とは何でしょう？

A Sinking Boat（沈没船）
On the boat are an American、 a British man、 a German、 an Italian、 a French man and a Japanese.
ボートには、アメリカ人、イギリス人、ドイツ人、イタリア人、フランス人と日本人が乗っています。
The captain urges the passengers to dive into the sea.
船長は乗客に海に飛び込むように説得しています。
He says to the American man、 “you will be a hero if you do it.”
アメリカ人に対しては、「あなたは飛び込めばヒーローになれますよ」と言いました。

to the British man、 “you will be a gentleman.”
次にイギリス人に対して 「あなたは紳士になれる」 と言いました。
to the German guy、 “this is an order to jump.”
ドイツ人に対しては 「あなたは、飛び込まなくてはならない。それがルールだ。」 と言いました。
to the Italian man、 “you will be loved by many women later.”
イタリア人に対しては「後に多くの女性から愛されますよ」と言いました。
to the French man、 “don't jump”
フランス人に対しては「飛び込んではならない」と言いました。
and to the Japanese man、 “everyone is jumping!”
そして、日本人に対しては 「ほかの人はみんな飛び込んでますよ」と言いました。

早坂隆 (2006)、http://toeic-town.net/titanic-joke/

比較文化論としては面白いもので、日本語においても「ほかの人はみんな○○○○てますよ」という発想に基づく表現は見られる。

(6) ファミレスで
A:「コーヒーはホットになさいますか、アイスになさいますか」
B:「私、ホット」
C:「私もホット」
D:「僕もホット」

2016 年 2 月茨城県内で収録

この会話におけるAからDの4者の会話は早坂 (2006)の日本人を論じた例に通じるものである。異なるものを較べれば、違いが見えるのは当然だが、本稿では日本語らしさの背景にある発想を文化論に求める。

2.文化論文献リスト

本稿を記述するために目を通した日本文化論を年代順に示す。

ルース・ベネディクト (1966)『菊と刀』長谷川松治 (翻訳)、講談社
中根千枝(1967)『タテ社会の人間関係-単一社会の理論-』、講談社
土居健郎(1971)『「甘え」の構造』[増補普及版]、弘文堂
深作光貞(1971)『日本文化および日本人論―猿マネと毛づくろいの生態学』、三一書房
梅原 猛 (1976)『日本文化論』、講談社
長谷章久(1985)『日本文化論Ⅰ』「1世界の中の日本文化」、放送大学教育振興会
石田英一郎(1987)『日本文化論』、筑摩書房
青木保(1990)『日本文化論』の変容―戦後日本の文化とアイデンティティー』、中央公論社
尾藤正英(1995)『日本文化論』、放送大学教育振興会
尾藤正英(2000)『日本文化の歴史』、岩波書店

李御寧（2007)『「縮み」志向の日本人』、講談社
宮元健次（2008)『日本の美意識』、光文社
船曳建夫(2010)『「日本人論」再考』、講談社
藤田正勝（2017)『日本文化をよむ 5つのキーワード』、岩波書店

上記、研究者の論を読み通したが、本論では、ルース・ベネディクト(1966)、中根千枝(1967)、土居健郎(1971)、石田英一郎(1987)の記述を取り上げる。

3. ルース・ベネディクト（1966)『菊と刀』

ルース・ベネディクトはアメリカ人の文化人類学者で、本著の日本文化論は秀逸なものとして評価され、具体的には「恩」と「義理」をキーワードとして、日本文化を論じた。

(7) 日本語には、恩を受けて感じるこの同じ心苦しさを表現する、多くの感謝の述べ方がある。その中で、最も意味にまぎれのない、大都市の近代的百貨店で採用している“アリガトウ”という言い方は、「これは容易ならぬことです」。”Oh、 this difficult thing”の意味である。日本人は通常、この「容易ならぬこと」というのは、客がものを買うことによってその店に授ける、大きな、かつ希有な恩恵のことであると説明する。この言葉は一種のお世辞である。それはまた、人から贈り物を貰った場合にも使うし、その他数えきれぬほど多くの場合に用いられる。

ベネディクト(1966) p.130

(8) 感謝を表す他のいくつかの言葉は、「気の毒」と同じように、恩を受けたることの困難さを指し示す。個人経営の商店主は、たいてい、文字通りには、「これは終わりません」という意味のこと（スミマセン）を言う。「私はあなたから恩を受けました。ところで、現代の経済組織の下では、私はとうていあなたに恩返しをすることはできません。私はこのような立場に置かれたことを遺憾に存じます」というのである。「すみません」を英訳すると、‘Thank you.’ ‘I’m grateful.’(感謝の念を抱く)、もしくは、‘I’m sorry’ ‘I apologize’(陳謝する)となる。たとえば街を歩いていて風に吹き飛ばされた帽子を、誰かが追っかけてくれた場合に、ほかのどの感謝の言葉よりも好んで用いられるのは、この語である。その人があなたの手に帽子を返してくれる時に、あなたは儀礼として、それを受け取るに当たってあなたの感じる内心の苦しみを告白せねばならない。「この人は今こうして私に恩を提供してくれるが、私はこの人に、まずこちらから恩を提供してくれるが、私はこれまで一度もこの人に会ったことがない。私はこの人に、まずこちらから恩を提供する機会も持たなかった。こんなことをして貰ってうしろめたい気がするが、謝ればいくらか気が楽になる。

ベネディクト（1966) pp.130-131

英語に翻訳した際の発想が、英語の発想にはない、独自なものであることを端的に述べている。謝罪表現と感謝表現を例に論を展開している。

4.中根千枝(1967)『タテ社会の人間関係-単一社会の理論-』

中根千枝は社会人類学者である。インドやチベットと比較しながら、日本の社会組織を分析し、日本における人間関係を論じている。

(9) 日本人はなぜちょっとしたことをするにしても、いちいち人と相談したり、寄り合って決めなければならないのだろう。インドでは、家族成員としては（他の集団成員としても同様であるが）必ず明確な規則があって、自分が何かをしようとするときには、その規則に照らし合わせてみれば一目瞭然にわかることであって(何も家長やその成員と相談する必要はない)、その規則外のことは個人の自由にできることであり、どうしてもその規則にもとるような場合だけしか相談することはないのに。」

中根(1967) p.43

(10) 象徴的なことば「去る者は日々に疎し」直接接触の機能は、その期間の絶対的長短とともに、その現実的な持続性が問題となる。集団成員などと大げさな用語をもってくるまでもなく、友人・知人・親類といった人たちとの間でも、ある期間ゆききをしなかったり、音信の交換がないと疎遠になることが多い。一定の親しい人々に「ご無沙汰をする」ということは、(相手の期待を裏切り)たいへん失礼なこととされている。そして実際、長い間接触しないで突然会ったりすると、どうもチグハグな気持ちができてしまって、かつての親交関係になかなかはいることができなかったりする。このような日本的人間関係に比べて、中国人・イギリス人・インド人などの場合はずいぶん違う。五年も十年も音信不通でありながら、昨日別れたばかりのような再会の感激をもつことができるのである（これは、私の限られた経験であるが、多くの経験者の賛同をうるところであろう）。彼らにとっては、いったん設定された親交というものは、その後の実際の接触の有無にかかわらず存続しうるのである。

中根 (1967)pp.58-59

(11) さらに興味あることは、「神」の観念自体にも。これはみられるのではないだろうか。日本人にとって「神」「祖先」というものは、この「タテ」の線のつながりにおいてのみ求められ、抽象的な、人間世界からまったく離れた存在としての「神」の認識は、日本文化の中には求められないのである。極端にいえば、「神」の認識も個人の直接接触的な関係から出発しており、またそれを媒介とし、そのつながりの延長として把握されている。常に、自己との現実的な、そして人間的なつながりに、日本人の価値観が強くおかれているといえよう。このあまりにも人間的な-人と人との関係を何よりも優先する-価値観をもつ社会は宗教的ではなく、道徳的である。すなわち、対人関係が自己を位置づける尺度となり、自己の思考を導くのである。「みんながこういっているから」「他人がこうするから」「みんながこうしろというから」ということによって、自己の考え・行動にオリエンテーションが与えられ、また一方、「こうしたことはすべきではない」「そう考えるのは間違っている」「その考えは古い」というような表現によって、他人の考え・行動を規制する。このような方式は、常に、

その反論に対して、何ら論理的、宗教的理由づけがなく、もしそれらの発言を支えるものがあるとすれば、それは「社会の人々がそう考えている」ということである。すなわち、社会的強制である。社会の道徳とは、修身の本にあるのではなく、いうまでもなく、社会的強制である。したがって、その社会がおかれた条件によって、善悪の判断は変わりうるものであり、宗教が基本的な意味で絶対性を前提しているのに対して、道徳は相対的なものである。日本人の考え方や信条が戦前・戦後とたいへんな変わり方をしたことや、また戦後においてすら、現在までずいぶん変化している事実は、こうした動く実態自体(社会)に価値の尺度をおいているためである。

中根(1967)pp.169-170

日本語の配慮のメカニズムを記したものである。年代的上下関係は、日本語にも強く反映されている好例を示している。「社会的強制」を「慣習」と言い換えても良いと思われるが、「みんながこういっているから」「他人がこうするから」「みんながこうしろというから」という他者を意識した表現が日本語に見られることは、1 節（5）（6）で示した日本人の同調する例を強化する。

5.土居健郎(1971)『「甘え」の構造』

土居健郎は、日本の精神科医の観点から、日本人の精神構造を「甘え」という述語で記述している。

（12）渡米して最初の頃だったと思うが、日本の知人に紹介された人を訪ねてしばらく話をしていると、「あなたはお腹がすいているか、アイスクリームがあるのだが」ときかれた。私は多少腹がへっていたと思うが、初対面の相手にいきなりお腹がすいているかときかれて、すいていると答えるわけにもいかず、すいていないと返事をした。私には多分、もう一回ぐらいすすめてくれるであろうというかすかな期待があったのである。しかし相手は「あー、そう」といって何の御愛想もないので、私はがっかりし、お腹がすいていると答えればよかったと内心くやしく思ったことを記憶している。そしてもし相手が日本人ならば、大体初対面の人にぶしつけにお腹がすいているかなどときくことはせず、何かあるものを出してもてなしてくれるとのにと考えたことであった。

土居(1971)pp.1-2

（13）それからこれも比較的早い頃であったと思うが、ある日私を指導する立場にいた精神科医が私に何か親切なことをしてくれた。それが何だったかはもう忘れてしまったが、ともかく極些細なことだったと思う。ともかく私はお礼をいう必要を感じたが、なぜかサンキューという言葉がすぐ口に出ず、思わず” I am sorry.”といった。すると彼が怪訝な顔をして”What are you sorry for?”と聞き返してきたのです。すっかり面喰らってしまった。私がサンキューといえなかったのは、それは目上である相手に対しあまりに対等な口のきき方であると感じたからだと思う。

土居(1971)p. 2

(14) しかしここで問題は、なぜ日本人が親切の行為に対し単純に感謝するのでは足れりとせず、相手の迷惑を想像して詫びねばならぬかということである。それは詫びないと、相手が非礼と取りはしないか、その結果相手の好意を失いはしないかと恐れるからである。したがって相手の好意を失いたくないので、そして今後も末永く甘えさせてほしいと思うの、日本人は「すまない」という言葉を頻発すると考えられるのである。以上考察してきた「すまない」という場合の心理は、日本人の罪と恥の感覚、またなぜ日本で西欧的な自由の観念が育たないかという問題にも関係があるので、後に再び論ずるつもりである。

土居(1971)pp. 27-28

(15) 義理も人情も甘えに深く根ざしている。要約すれば、人情を強調することは、甘えを肯定することであり、相手の甘えに対する感受性を奨励することである。これにひきかえ義理を強調することは、甘えによって結ばれた人間関係の維持を賞揚することである。甘えという言葉を依存性というより抽象的な言葉におきかえると、人情は依存性を歓迎し、義理は人々を依存的な関係に縛るということもできる。義理人情が支配的なモラルであった日本の社会はかくして甘えの瀰漫した世界であったといって過言ではないのである。

土居(1971)pp. 32-33

遠慮すること、聴者を慮ることは聴者に依存することに因るという持論を展開したものである。日本語のコミュニケーションは聞き手に依存中心のもの（滝浦 2001）と言われるが、そのメカニズムに踏み込んだものである。

6. 石田英一郎（1987)『日本文化論』

石田英一郎は、オーストリアなどヨーロッパでの影響を強く受けた文化人類学・民俗学者である。

(16) 日本民族の一面として、首尾一貫した論理を追って追究していくとか、徹底的なところまで問題を掘り下げ、つきつめることをしない、むしろ徹底的にすることをよしとしない傾向が日本人にはあるということがわかります。日本人は合理的でないとよくいわれますが、日本人の従来の感覚からいうと、合理的であることが価値が高いとはかぎらないのです。合理的とか非合理的とかいうことに価値付けを行うようになったのは、明治以降に、西洋文明の基準がわれわれの生活のなかにはいってきてからのことです。本来の日本人の感覚は、むしろ非合理性とか、超合理性とかいうものに価値を奥置くような点があります。さらに、ものごとを区分する、類別するという西欧的な論理の前提を日本人は重視しません。善と悪、自と他、主体と客体、人間と自然、生と死、というようにものを類別し、対立させることによって概念をくみたてるとい

うことをしない思考形式に、日本人は慣らされています。したがって、桑原武夫氏がいうように、日本では論理学、修辞学が発達しませんでした。日本人は西欧流の論理学や修辞学を発展させる必要に迫られなかったのです。非常にエンドガマスな社会で、お互いに話せばわかるではなくて、話さなくてもわかるという日本的な感覚によって、コミュニケーションが行われてきたのです。日本の政治家は、いまでも腹芸とか以心伝心といった伝達方法をよしとします。要するに、論理を追って相手を説得する、あるいは相手を感動させることばをつらねて、一般の国民に訴える修辞学とか雄弁術というようなものを、日本人は重んじないのです。むしろ、雄弁家というとなにか軽く、軽蔑するような感じをもちます。大学にはいまでも弁論部があり、弁論大会が行われています。しかし、いわゆる政治家の雄弁はあまり重んじられないためか、いまの政治家の演説をきいても、われわれは聴覚的に魅力を感じません。ところが、ヨーロッパでは、ギリシャ・ローマ時代から弁論ということは、一般知識人の、とくに政治家には欠くべかざる資格とされています。政治家が広場において一般の市民を前に自分の主張を訴え、相手を説得するということが、デモクラシーの前提になっています。

石田（1987）pp.162-164

（17）日本語の問題、日本語そのものが日本文化と密接な関係にあるということも、ここでエスノリングスティックスの領域において学問的に分析できると考えられます。たとえば、私はよく「何なになのだが」といいます。この「が」という、みなさんもよくお使いになる助詞が問題なるのです。日本語の構文では句と句とのあいだを「が」でつなぎます。この「が」を英語に訳すとき、but としたらおかしいし、and としてもそのほんとうの感じがでません。他のどの西欧語をとってみても、日本語の「が」という接続助詞の意味をそのまま伝えることはほとんど不可能です。日本においては、独特であいまいな、論理学のなかにはいらないと思われるようなことばの使い方が、日常行われています。またその使い方で、日本の人間関係が保たれているともいえるでしょう。たとえば、日本人のご亭主が奥さんにむかってもし「きょうは映画に行こうか、芝居にしようか」というと、日本の女の人だったらほんとうは映画にいきたくても「自分は映画に行きたいんだけど」と、あとに余韻をのこし、相手に判断をゆだねるようないい方をします。ところが西洋人だったら、「自分は映画にゆきたい」あるいは「ゆきたくない」というように、イエスかノーをはっきりこたえるでしょう。西洋人からみて日本人が不思議なのは、イエスかノーがはっきりしないところです。日本人は心のなかで何をかんがえているのかわからないと西洋人はいいます。また、おかしくもないのにニヤニヤする、いわゆるジャパニーズスマイルが西洋人には不可解なのです。なぜおかしくないのかと不思議な顔をしてたずねる西洋人もあるくらいです。日本人と西洋人のあいだにある感覚のズレも、文化の構造の問題と大いに関連のあることです。これらはすべて学問的分析の対象になる問題です。ことに日本民俗学のような学問をする人間は、ただ農村の行事がどうだとか、山の神と田の神がどういう関係にあるかというようなことだけを調べて、こと足れりとするわけにはいきません。それらをふまえながら、いまいったような民族の文化の根底にあるもの、そ

れを学問的にどうとらえ、構造的にどう分析するかといったことが、これからの学問的仮題になるだろうと思います。

石田 (1987)pp.164-166

非常に示唆的で、ヨーロッパ的論理が日本にはないという主張である。しかしながら、ここに日本的なものがあるという主張である。

7.まとめ

本稿では、日本文化論から、特徴的、あるいは典型的日本語表現や、日本的な発想を書き出した。日本語の有する論理性とは何か。日本語母語話者が有する判断、これは、日本の今まで有してきた地理的な条件、同源とされる「群」「村」的な社会があり、それをソトと区別したウチ社会での共通感覚・共通認識としてきた。しかし、そのウチ社会も、人間の移動性が活発になり、ウチ社会から飛び出したり、ウチ社会に非日本語母語話者が入ってくる社会に移行している現在、従来の日本語の論理性に変化があっても不思議ではない。1節(4)で紹介した「日本文化は決して他の文化や文明から孤立したものではなく、むしろその発端から現在にいたるまで他の文化との深い関わりのなかで成り立ってきたもの」(東京大学比較文学　比較文化研究室「文化紹介」) は的を射た表現であろう。

日本語らしい表現、あるいは慣習化された日本語の背景にある発想を、文化論の研究範疇に求めた。日本語表現と日本語使用者の言語行動には強い関係があると考え、文化論の日本語表現への言及に見られる記述を改めて読み返すことで、日本語コミュニケーション、日本語配慮表現のメカニズムを再考する一助としたい。日本語では、ある状況で、なぜこのように言うのかという問いは、日本語学習者は理解、納得の程度の差はあれ誰もが抱くものであろう。日本語教育、日本語コミュニケーション教育に関わる身として、日本文化論の意味をしっかりと受け止め、人文の知の理解の重要性、有効性を再認識し、言語研究に、言語教育に活かす方法を考えていきたく思う。

参考文献

青木保(1990)『日本文化論』の変容―戦後日本の文化とアイデンティティー』、中央公論社

石田英一郎(1987)『日本文化論』、筑摩書房

梅原猛 (1976)『日本文化論』、講談社

小野正樹(2015)「慣習化された日本語配慮表現の発想」『日本語用論学会大会研究発表論文集』第10号 pp.311-314

滝浦真人(2001)「敬語の論理と授受の論理-「聞き手中心性」と「話し手中心性」を軸として-」『言語』30巻5号、大修館書店

土居健郎(1971)『「甘え」の構造』[増補普及版]、弘文堂

外山滋比古(1987)『日本語の論理』、中央公論社

中根千枝(1967)『タテ社会の人間関係-単一社会の理論-』、講談社

長谷章久(1985)『日本文化論Ⅰ』「1世界の中の日本文化」、放送大学教育振興会

早坂隆 (2006)『世界の日本人ジョーク集』、中央公論社

尾藤正英(1995)『日本文化論』、放送大学教育振興会
尾藤正英(2000)『日本文化の歴史』、岩波書店
深作光貞(1971)『日本文化および日本人論―猿マネと毛づくろいの生態学』、三一書房
藤田正勝（2017)『日本文化をよむ 5つのキーワード』、岩波書店
船曳建夫(2010)『「日本人論」再考』、講談社
宮元健次（2008)『日本の美意識』、光文社
李御寧（2007)『「縮み」志向の日本人』、講談社
ルース・ベネディクト（1966)『菊と刀』長谷川松治（翻訳)、講談社

辞書・辞典

『ジーニアス英和辞典』第5版（2014）南出康世編集、大修館書店
『日本国語大辞典』精選版（2006）、小学館

（小野正樹、筑波大学人文社会系教授、ono.masaki.ga@u.tsukuba.ac.jp）